

7月17日 AM6:00、5台の車に乗合わせ松本を出発。沢渡を経由して上高地へ向かう。新釜トンネルを抜けると青空高く聳える穂高連峰を望む。バスターミナルで登山準備を整え、総勢35名となり、AM8:00出発。明神、徳沢と梓川左岸沿いの林道を進み、AM11:15横尾に到着。早めの昼食を摂る。



河童橋袂で参加者35名全員で記念撮影



ゴゼンタチバナ



キノガサソウ



午後の陽が眩しく照らす涸沢雪渓を登る

昼食後、梓川に架かる橋を渡り、河原沿いの小石道を進む。左手に高度差600mの屏風岩を仰ぎ、登り1時間ほどで本谷出合の沢に架かる小橋を渡る。このあたりから夕立となり、大粒の雨に遭う。本谷出合からは、急な岩道の登山路が1時間程続き、ナナカマドの低木帯を抜けると、涸沢カールの残雪を踏む。雨が上がり、午後の陽が眩しく屏風のミミを照らしている。覆っていた雨雲が上がり始め、荘厳な奥穂高岳がその姿を現し始めた。雪渓を登り続けPM3:30、涸沢ヒュッテに到着、泊す。



朝陽が穂高岳の先鋒群を橙色に染めていく。ザイテングラード上部、展望が広がる。前穂高岳北尾根が間近に迫る。

翌18日快晴、雲海に浮かぶ浅間山の彼方から太陽が登ると、涸沢カールを囲む穂高岳の先鋒群を橙色に染めていく。AM6:30奥穂高山頂の西にそそり立つジャンダルム3163mを目指して出発。涸沢小屋前を抜けて、朝陽に輝く白い雪渓を登り、1時間程でザイテングラード取付きへ到着。ここから岩場を登り続けること1時間余り、一気に高度が上がると展望が広がり、前穂高北尾根の稜線が間近に迫り、東方に浅間山、八ヶ岳が青く望まれる。白出乗越に続く雪渓を横切りAM9:15穂高岳山荘に辿り着く。



振り返る北方に槍ヶ岳の先鋒が聳えている



ミヤマダイコンソウ



ハクサンイチゲ



ジャンダルムの威容

ここで軽荷となって AM9:45、1名を残し 34名が出発。いきなりの高さ 50m程の岩場を登り抜けると、西に重厚な笠ヶ岳が望まれ、振り返る北方に、北アルプスの峰々を従えるように槍ヶ岳の先鋒が、一層高く天を突いて聳えている。岩稜線を登り詰めると AM10:45 奥穂高岳全員登頂する。しかし休憩もそこそこにして腹ごしらえをして、33名がジャンダルムに挑戦、岩稜の登攀を開始する。

岩場の僅かなスタンス、溝や突起物の手がかりを頼りに馬の背の狭稜線を必死に降下し、一旦 200m程下の鞍部に降り立ち、鎖を頼りにロバの耳の岩壁を再び登攀。もう一度登り降りを繰り返し、PM12:35 霧に覆われたジャンダルム 3163mに見事登頂、15分後までには挑戦した 33名全員が登頂を果たした。「おめでとう！」握手を交わし、恐怖に打ち勝って登ってきた互いの勇気を称え合った。



岩稜線、「馬の背」を必死に下降する



ジャンダルム山頂三一六  
三mに、三十三名が登頂



ロバのミミから望む、  
ジャンダルム

PM1:00 過ぎ、最初のグループが下山を開始、往路と同じ岩稜ルートを引き返す。PM2:15 濃霧の中から全員が奥穂高岳山頂に戻ってくる。「ごくろうさん！」握手を交わす。登頂した満足感と緊張感から開放された安堵した皆の笑顔が眩しい。PM3:30 山荘に無事帰還。泊す。



朝陽が、山々をシルエット状に浮かび上がらせ昇る



ザイテングラード末端から岩礫帯をトラバース

3日目、19日、暗い早朝から、15名程が涸沢岳 3110mを目指し部屋を出て、登って行く。AM5:00、東の空が茜色に染まり、浅間山、常念、蝶の稜線をシルエット状に浮かび上がらせながら、徐々に太陽が登る。今日も暑い日となりそうだ。涸沢岳登頂グループとも合流し、AM6:30 穂高山荘からザイテングラード岩稜線の下山を開始する。いままでの行列の順序を変え、女性の前後にベテラン男性が入り、万が一に備える。岩場の急斜面の為、ストック使用を控え、手を使えるように配慮してもらい、三点支持を守るように指示する。

AM8:00 全員難なくザイテングラード末端に到着する。ここで残雪を利用し、荷を置き、雪斜面の登り降りの練習を行う。ここからは、岩礫帯をトラバースし、涸沢小屋までの緩い雪斜面を下るだけだ。雪斜面を歩き出すと、表面シャーベット状になっていて、歩き方によっては、制動が効かず滑りやすい。ベテランの人は、歩行が心配な人を手助けしながら、雪斜面を下りて行く。

AM8:20 頃、鈴木隊長の先頭グループが、雪溪の切れる 200m程手前で、70~80m後方のグループの異変を知らされる。「手首をひねった」と大声で知らせている。隊長は、早速早足で雪面を駆け登り、現場に急行。現場では雪面で滑って手を突いた時「手首を折った様だ」に変わっていて、既に傷害した女性の手首を固定していて、応急処置が終わっていた。その間、5分も経過していなかったであろう。傷害の女性は、ショックで顔が青ざめ、歩行も手助けしなければならない。



遭難は、写真雪溪中央部ルート上で突発する。



雪面を滑走してきた落石

周囲の参加者メンバーが、涸沢ヒュッテから借りた夏山雪渓用 4 本歯アイゼンを用意。鈴木隊長と山岳委員の 2 人が手助けして、アイゼンを靴に履かせていた瞬間、頭サイズの岩石が音も無く雪面を滑落して、隊長の右横の山岳委員の体にぶつかり、その体を雪面に 3~4m以上投げ飛ばした。すぐに様子を確認、怪我人は雪面に横たわり、顔をゆがめ痛みに耐えている。話をする事もままならない状態だ。

背中や腰を打撲していて、かなりの重症と判断。他に現場上部で、同じ滑石でもう一人、他の山岳委員が足を打撲していることが判明。ヘリコプター救助が必要と考え携帯電話するが、連絡が取れず、メンバー 2 人を涸沢小屋に救助要請を連絡の為、急いで下山してもらおう。小屋まで、急げば 20 分程と思われる。傷害した女性は、歩行を数人に補助してもらいながら、岩礫帯まで行って、待機してもらおうこととした。腰を打撲した山岳委員は、雪面を動かすことが無理であり、再落石を防止する為、メンバーの登山ザックで囲み、なんとか安全策とする。隊長は、他の善後策の指示をしながら、涸沢小屋へヘリ要請の為滑るように下山を急ぐ。

涸沢小屋では、無線連絡で夏季臨時遭難救助常駐隊へ連絡していたが、詰所に不在の為、いつも書置きをしているとの事、涸沢小屋主人から詰所に直行するようにいわれ、鈴木隊長が詰所に着くと、吉田常駐隊隊長が無線機を持ち、対応している所に出会う。

鈴木隊長から吉田常駐隊隊長に「遭難者が、落石により雪面に倒れ、動かせない、かなりの重症、ヘリを要請したい旨」手短かに話す。その間、涸沢小屋にいた常駐隊員 2 名が現場に向った。涸沢ヒュッテからスノーボードが用意されたが、そのままにして、吉田常駐隊長が現場方面に向う。鈴木隊長は、詰所にいるように指示され、無線連絡の質疑回答や警察の事情徴集にも応じるように言われる。下山してくるメンバーの指示や対応、遭難した家族の方への連絡や、保険会社との連絡などをせねばならず、詰所では一般者から外部との連絡はさせてもらえない為、複数のメンバーの人に、詰所に鈴木隊長の代わりに残留してもらい、涸沢ヒュッテまで登り、ご好意で電話連絡させてもらう。



遭難現場に救助用ヘリコプターが近づく



引き上げられ救出される山岳委員

写真提供 木村郁子さん

AM9:30 過ぎ、詰所に県警ヘリからの無線が入り、9:45 上高地を発ち、9:55 遭難現場に到着予定との事。待機していると、時間通りに涸沢カールの遭難現場上空にヘリが近づく、何度か上空を旋回するうち、遭難現場でも準備を整え、最終 AM10:15、打撲者 2 人を引き上げ、涸沢上空から飛び立つ。手首骨折の女性は、引き返したヘリにより、AM11:00 引き上げられ、3 人とも無事に信州大学附属病院へ運ばれ、手当を受ける。手首を骨折した女性と、足打撲の 2 人は、病院で手当の後、その日の午後早めに退院、通院などで手当を受けることとなった。腰打撲を受けた山岳委員は、骨盤骨折、肋骨骨折、全治 2 ヶ月の重症と診断された。

怪我をされたメンバーや山岳委員の 3 人の方々へお見舞い申し上げるとともに、早い完全な回復をお祈りいたします。そして、これら 3 人の心を支え、看病し、手当を施してくださった多くのメンバーの方々に心から感謝を申し上げる次第です。



ジャンダルム登攀後、奥穂高岳山頂で記念撮影



何事も無かったように聳える、上高地河童橋から望む奥穂高岳

参加者は、AM11:00、涸沢ヒュッテから 20 人ほどの第一グループが下山を開始。最終の AM11:00 のヘリコプター引き上げ後、残り全員が涸沢ヒュッテに集結。警察から電話による鈴木隊長への事情徴集も終了し、RM12:00 過ぎ涸沢を後に急ぎ足で下山する。PM4:00 過ぎ、上高地河童橋付近で、沢渡に向う全員が合流。タクシーに乗り込み、PM4:45 沢渡到着。5 台の車に乗り合わせ、最終 PM6:15 松本で解散とした。

「心を躍らせて登った、急峻な岩の峰々と残雪濃い夏の穂高岳。山での楽しみと安全は、まさに一瞬の油断が大敵と教わった登山だった。」

MHC 登山講習責任者 MHC 理事長 鈴木雅則